

フィリピン独立戦争と日米比関係

平
間
洋
一

はじめに

一 第一次決起と軍艦金剛の寄港

(一) 日本賛美と日本への期待

(二) 金剛のフィリピン寄港

二 第二次決起と日本の対応

(一) 日本政府の対応

(二) 独立戦争に対する非軍事的援助

(三) 独立戦争に対する軍事的援助

三 独立戦争以後に生じた日米比関係

(一) フィリピン独立問題と日米関係

(二) フィリピン独立問題と日比関係

おわりに

はじめに

フィリピンの独立戦争（一八九六―一八九八年）に対する日本の対応、特にアメリカに対する日本の対応には、アメリカによるフィリピンの併合を容認し、それに協力する日本政府と日本海軍の対応と、フィリピン独立派を支援する日本陸軍と、志士と呼ばれるアジア主義者の対応との二つの異なる対応があった。現在までの研究では、志士を主体とし、陸軍が支援した日本のフィリピン独立戦争に対する援助は大きなものではなく、それがフィリピンの独立戦争に及ぼした効果は皆無であったというのが一般的である。しかし、フィリピン人、特に独立派にとりアジアで最初に西欧化し、近代国家となった日本の存在は大きく、一八九六年（明治二九年）のアギナルド（Emilio Aguinaldo）の決起には、日本海軍の軍艦金剛の寄港が影響した可能性も考えられるし、数人の志士の渡比と途中で沈んでしまった武器（弾薬のみといわれている）が、フィリピン独立派に精神的なインパクトを与えたことは事実であり、日本の存在そのものがフィリピン人、特に独立派の独立運動に有形無形の影響を与えたことも事実である。しかし、これら些細な対フィリピン支援が、その後の日米関係や日比関係に与えた影響については、余り研究がなされていない。そこで本論では、一八九六年にスペインとの間に生じた第一次対スペイン独立戦争、一八九八年の対米独立戦争に与えた日本の有形無形の援助の影響と、その些細な各種の援助や好意が、その後の日米比三国間関係に与えた影響について明らかにしたい。¹⁾

一 第一次決起と軍艦金剛の寄港

(一) 日本賛美と日本への期待

当時のアジアは日本とタイ国を除き、殆どの国がヨーロッパ列強に支配されて植民地となっていた。日本が長い鎖国を破って世界に門戸を開き、短期間に近代化に成功すると、この日本の近代化がアジア諸国の民衆にアジア人としての大きな自信を与えた。そして、この近代化された新興国日本がヨーロッパの勢力を駆逐し、アジアの仲間として独立運動に援助を与えてくれるのではないかとの期待を生んだ。この感情は日清戦争後に特に高まり、フィリピンでは日本がスペイン、次いでアメリカを撃退し、独立を援助してくれるのではないかとの期待を高め、多くのフィリピン人が日本人に接触し、多くのフィリピン人が亡命先をヨーロッパから日本に変更し、東京や横浜にはフィリピン人町が生まれた。そして、一八八八（明治二一）年にはフィリピン独立の父として最も尊敬されているホセ・リサル（Jose Rizal）が、一八九五（明治二八年）年にはホセ・ラモス（Jose Ramos）が独立に対する援助を求めて来日した。そして、これらのフィリピン人の独立願望に対して、志士とよばれた多くの日本人が、ヨーロッパの植民地化に対抗し、アジア人のアジアを建設すべきであると同情し協力した。

最初にフィリピンに注目したのは菅沼貞風で、菅沼は一八八八（明治二一）年に『新日本の図南の夢』を発行し、フランスが占領しているベトナム、スペインが侵略しているフィリピン、イギリスが占領中のマレーやビルマの独立を助け、未だ植民地となっていない中国や朝鮮、タイなどの東洋勢力を結集して「白人の跋扈」を拒否すべきであると主張した。そして、フィリピンのスペイン兵が極めて少ないことから、最初にフィリピンを開放して植民地にしようと、一八八九（明治二二）年には日南（福本誠）を誘ってフィリピンに渡った。しかし、菅

沼は渡比二カ月後にはマニラで赤痢のために病死してしまった。

その後、一八九三(明治二六)年には森本藤吉が『大東合邦論』を著し、「亜細亜黄人国之一大連邦」の形成を主張したが、このアジア主義は日露戦争の勝利やアジアに高まった民族主義的独立運動、近代化しつつある日本に対する期待に触発されてさらに高まった。そして、一九一三(大正二)年四月にカリフォルニア州議会で排日移民法難が制定されると、これを契機として日本国内には反米論が高まり、それに比例してアジア主義も高まった。そして、同年一〇月に発行された『日本及び日本人』には、「大亜細亜主義」が特集され、排日移民法の成立は全アジア人に対する宣戦布告であり、アジア諸民族が提携して西欧諸国の植民地主義に当たるべきであるとの主張が勢いを得て行った。⁽²⁾

(二) 金剛のフィリピン寄港

フィリピンの独立秘密組織のカティプーナン(Katipunán)は、一八九二(明治二五)年七月七日にマニラ市の貧民街であるトンド地域で生まれたが、この組織もフィリピン最初の独立運動も、ボンファシオ(Antes Bonifacio)によって率いられていた。独立運動の機関紙であるラ・ソリダリダッド(Ua Solidaridad)は、日本軍が援助に来るという希望的記事を掲載した。最初のスペインに対するフィリピン独立決起は、一八九六(明治二九)年八月二六日に行われたが、それは練習艦金剛が兵学校卒業生の遠洋航海でマニラに寄港したのに同期して生じた可能性が高い。すなわち、最初の決起の三カ月前の一八九六年五月に金剛がマニラに入港すると、カティプーナンでは日本へ援助を求めるために使節を送ることを計画し、金剛が入港すると歓迎会を挙行したいと申し出た。しかし、艦長の世良亮はスペインとの関係を考慮し謝絶したが、カティプーナン代表者と会うことに

は同意した。この会談に関するフィリピンの資料によれば、会見はフィリピンで著名な日本人で、ボニファシオとも親しい田川盛太郎⁽⁴⁾によりアレنجされ、マニラの日本町で行われたとされている。しかし、双方とも偽名を用いたのであろうか、日本人としてはゴオノリタ (Goonoria) 領事(当時、領事館閉鎖中)、艦長ヒマラ提督(Himara: 独立戦争に参加した志士の平山周に発音が類似)。そして、この会談で小銃一〇万丁、大小各種口径の砲一五〇門、およびこれらに必要な弾薬を一億五〇〇〇万ペソで購入する契約書が、七月二二日付でテアンダロ(Tiandalo: 偽名)により署名された。そして、決起したならば日比連合軍を組織し、スペインによるフィリピン支配を打破することが約束されたという。また、別のフィリピン側の史料によれば、日本政府も資金、兵器、弾薬および軍隊をフィリピンに派遣するというものであった。さらに、これと異なるフィリピン側の記録によれば、一八九六年五月に金剛がマニラに入港したとき、カティブナーンの代表者が日本に援助を要請する手紙を艦長に手渡そうと日本人町で会談した。艦長は代表を手厚く持てなしたが書面を受け取ることは拒否し、趣意を天皇に伝えると約束した。また、艦長はぜひ代表を日本に派遣するようにと話していたが、以後、艦長からは何の連絡もなかったという。この金剛艦長との会談について、フィリピンの学者クレール (Francis St. Clair) は、会談が行われたことは多分事実であつたろう。しかし、会見に応じることと要求を真剣に聞き、実現しようとする⁽⁵⁾ことは別であると書いている。

一方、日本側の資料によると、世良艦長は「土人ノ有力者五人ニ面会ヲ許シタルニ、後日、土人達ハ一書ヲ認メ艦長ニ呈セントセリ。書中現政府ノ悪政ヲ憤リ帝国ノ善政ヲ賞賛シテ敬慕ノ情ヲ述ヘ、他年其保護ノ下ニ立タシコトヲ渴望スルノ意を表シタリ。尤モ艦長ハ之ヲ受領セサリシモ其訳文ヲ持チ帰ラレタトイフ⁽⁶⁾」というものであった。金剛の寄港三カ月後に第一次決起が行われたが、日本からは何の援助もなかった。しかし、この金剛の

寄港が背後にあったのであろうか、あるいは在日フィリピン人のホセ・ラモスなどの武器購入を巡る動きが察知されたためであらうか、外国の新聞には日本から商船二隻が入港し、三〇〇丁の銃が陸揚げされたとの報道⁽⁷⁾、武器や弾薬が日本から到着したなどとの無数の噂が流布し、警戒したスペイン当局からマニラの日本人貿易商が、厳しい家宅調査や身柄勾留などを受けていた。⁽⁸⁾そして、これらの噂を利用したのであろうか、一八九六年九月一日にはカティブーナンの本部から、各支部に次のメッセージが発せられた。⁽⁹⁾

アギナルド司令官からの緊急信によれば、我々を支援するために日本の軍艦が今日入港したとの確実な連絡が入った。なお、その軍艦はコレヒドール島の反対側に投錨している。

革命は八カ月以内にマニラ近郊の八つの州に広がった。しかし、スペインに対する最初の戦いに成功した後、武器弾薬や練度⁽¹⁰⁾に欠け、内部分裂を起こした革命軍は敗北し、このためカティブーナンの創設者のボンファシオは権限を失い、権力はアギナルドに移った。そのうえ、一八九七年二月一日には、アギナルド以下一三名が同士を裏切⁽¹¹⁾って、香港に亡命することでスペインとの講和に応じたため第一次独立運動は消滅した。

二 第二次決起と日本の対応

(一) 日本政府の対応

一八九八(明治三一)年四月に米西戦争が勃発すると、五月九日に香港の独立派は、この戦争を利用して独立を達成しようと、日本へ援助を依頼することを決した。しかし、この決議は五月一三日の会議でアメリカは領土に対する野心がないので、アメリカに協力して独立を達成すべきであらうとのアギナルド派の反対により覆され

てしまった。⁽¹⁰⁾そして、アギナルドはアメリカ軍艦マックカロシュ (Hugh MacCulloch) に便乗し、五月一九日に帰国し、六月一二日には独立を宣言し革命政府を樹立した。しかし、アギナルドはアメリカの意図を誤算し、アメリカに裏切られた。アメリカ軍が八月一四日にマニラを占領したが、フィリピン独立軍はマニラ市街へ入ることを拒否され、スペインとの降伏文書はスペイン総督ハウデネス (Don Fermin Jaudenes) と、アメリカ軍指揮官メリット (Wesley Meritt) 少将の間で調印され、さらに一九八八 (明治三二) 年二月一〇日に調印されたパリ平和協定で、二〇〇〇万ドルでフィリピンはスペインからアメリカに売却されてしまった。裏切られたアギナルドは、アメリカに対して銃を取った。そして、一八九九年二月四日には、フィリピン独立派とアメリカ軍との間で戦闘が開始された。独立派は日本に武器弾薬の援助を要請し、新しく樹立された革命政府を日本政府に認証させようと、ポンセ (Maliano Ponce)、リチャウコ (Faustino Lichauco) を派遣した。しかし、当時の日本は日清戦争には勝ったが、独仏露三国から遼東半島返還の干渉を受けるなど、日本に対して友好的態度を示している国は、アメリカとイギリスしかなく、日本政府としてはフィリピンがドイツやフランスなどのヨーロッパ諸国に支配されるより、日本に好意的なアメリカが支配することを望んでいた。このため、日本政府や日本の官憲の独立派に対する対応は冷たく、援助を拒否したのみならず、日本政府はこれら代表を外交官として認証することもなかった。⁽¹¹⁾

一方、日本政府は動乱開始直後の五月二日には中立を宣言し、「軍事視察及在外帝国臣民ノ保護」のため巡洋艦松島、浪速、秋津島を交互にマニラに派出することとし、五月一二日には秋津島がマニラに到着、その後、常に一隻がマニラに在泊し、秋津島によって領事の三須久米吉や陸軍少佐明石元次郎及び数人の新聞記者などがマニラに到着した。しかし、日本の新聞も一部を除き、ドイツがフィリピンを領有することを恐れ、日本とイギリ

スはアメリカを支援すべきであると主張していた。また、派遣された秋津島の艦長斎藤実（のちの大将、総理大臣）大佐も、ドイツとフランスがスペインに同情的であり、特にドイツはフィリピンに対する野心が強く、スペインと秘密にフィリピンの譲渡についての話し合いをしているとも報告していた。⁽¹³⁾

日本政府にとりフィリピンがヨーロッパの勢力の支配下に入ることは大きな不安であり、特に太平洋島嶼をスペインから購入し、ニューギニアやサモアを占領し、三国干渉に加わり、さらに中国に武器などを売り込み東洋への進出を進めつつあるドイツは大きな脅威であり、フィリピンがドイツに渡ることを最も恐れていた。そして、このような国際情勢から、日本政府や現地に派遣された日本海軍はアメリカに対して好意的対応を示していた。

また、日本政府は長崎をアメリカ軍の補給基地として認めただけでなく、フィリピンに向かうアメリカ陸軍の軍馬や、ロバを休養や訓練のために、神戸や長崎で陸揚げすることを認め、さらに、輸送船モルガン・シテイ (Morgan City) が瀬戸内海で座礁すると、日本海軍は最高速の巡洋艦吉野を直ちに現場に派遣し、救助に必要ならゆる援助をすることをアメリカ海軍に伝えていた。⁽¹⁴⁾ また、マニラに派遣されていた秋津島艦長斎藤実大佐は、ドイツ海軍の指揮官フォン・ディデルシュ (von Diederichs) から、アメリカ海軍のマニラ湾の封鎖が厳格過ぎ、中立条約に違反しているとの抗議を連合してアメリカ戦隊司令官デューイ (George Dewey) に提出しようとの申し出を受けたが拒否した。⁽¹⁵⁾ このためか、アメリカの司令官デューイも、我々が封鎖作戦を行っていたときに、日本は一隻から二隻の艦艇を派遣していたが、日本政府のアメリカに対する好意は、派遣された日本海軍艦艇の対応に良く現れていたと報告している。⁽¹⁶⁾

さらに、日本政府はアメリカがフィリピンを保有するか否かを決めかねていると、九月一日、そして九月八日に、フィリピンの領有に付いて次のような見解を、アメリカ政府に通知するなど、アメリカが領有することを望

んでいた。⁽¹⁷⁾

スペインが今後フィリピンを支配する力を回復することは不可能であり、また、フィリピン人が「外国ノ庇護ナク純粹土民組織ノ政府ヲ設ケタレハトテ、政府タルヤ必ス協同一致ヲ欠キ制御ノ手段ナキハ勿論、自衛ノ道サエ立チ難ク……秩序壞乱シ其結果蠶食心深キ他外国ノ好餌トナルヤ必セリ」。日本政府としては「合衆国ノ主權ヲ延テ以テ、此等領土ノ上ニ布及セシムルハ本問題ヲ解クニ最易ノコトニシテ、日本国ニ於テモ之ニハ全然同意ヲ表スル所」である。日本政府はフィリピンに関して領土的野心はない。しかし、日本政府は極東における平和と極東に於けるパワーバランスには大きな関心を有している。アメリカの統治がフィリピンに及ぶことは、日本にとっては歓迎するところである。もし、アメリカ一国でフィリピンを統治せず、アメリカとともに二、三の国が連合して統治することとなり、アメリカ政府が同意するならば、日本がフィリピンを統治する責任を分担しても差し支えない。

(二) 独立戦争に対する非軍事的援助

日本陸軍はフィリピン独立戦争に強い関心を持ち、戦争が勃発すると、陸軍参謀本部は直ちに時澤右一大尉をアメリカの輸送船に便乗させ、軍事情勢視察のためにマニラに派遣した。これに加えて、台湾軍から楠瀬良彦少佐、次いで坂本志魯雄大尉（のちに国会議員）が派遣された。特に台湾軍から派遣された坂本大尉は、貿易商及び新聞記者として長期間マニラに居住するよう指示され、一八九七（明治三〇）年三月に台湾を出発した。フィリピンに渡った坂本大尉は、カティブーナンの中枢に接近し、幹部会議にも出席するなど深くかわるようになった。アメリカの裏切りが明確になった六月一二日にアギナルドは独立宣言を発し、対米戦争の激化とともに独立派

の日本に対する期待は高まり、この情勢の変化を受け現地からの報告も、独立派に対する同情が高まって行った。米西戦争が終戦を迎えた二日後の八月一日に、坂本大尉は緊急信で台湾軍司令部に、日本が放置するならばフィリピン独立組織は、アメリカの強大な軍事力の前に崩壊する危険がある。もし、台湾軍から一個大隊が派遣されるならば、アギナルドがマニラを保持し、フィリピンの自由と独立が確保できるであろうと報告した。⁽¹⁸⁾

また、陸軍参謀本部から派遣された時澤大尉も、フィリピン人の日本に対する「敬慕ニ反シ、我が国ノ態度」が曖昧なため、知識人の一部には「失望的観念」が生じ、「日本ハ冷淡ナリトノ思想ヲ懷カシメタリ」。もし、このような風潮が「一般寓直ナル土人ニ伝搬セバ、他日我ガ南進ノ妨害タル事決シテ少ナカラザルベシ」と、何らかの援助をすべきであると報告した。⁽¹⁹⁾ 一方、マニラ領事の三増久米吉も、九月一日にフィリピン独立派代表のサンディコ (Teodoro Sandiko) への会話を引用し、「我々は日本の保護支援を受けて独立を熱望している。アジアの大国である日本が、われわれの独立戦争を援助しないのは悲しくまた遺憾である。日本が直面している困難な状況は理解しているが、アジアの強国である日本は力もあり、我々は日本の援助を期待している」。そして、三須領事は、もし、この申し出を無視するならば、フィリピン人の日本に対する称賛を失うので、訪日したフィリピン独立派使節団を暖かく迎えるよう進言した。⁽²⁰⁾

さらに、三増領事は翌一八九九(明治三十二年一月)に、「米兵等ノ跋扈跳梁」甚だしく、「土人ヲ輕視スル益々甚シク、或ハ酒食ノ代価ヲ払ハス、或ハ多クノ現金ヲ借りテ還サザル者アリ」。……このため「米國占領軍ノ配下ニ一時安堵シタル人心モ、今ヤ却テ西國ノ昔時ヲ追慕スル程」であり、独立軍の士気も高く、オチス (Elwell S. Otis) 司令官が発した「フィリピン人に告げるとの宣言」は、「徒ニ島民ノ敵愾心ヲ挑発シタル迄」であり、……これはハワイ併合の「倖夢未タ覚メサルノ致ストコナリト、或外國人ハ評スル」状態であると報告した。⁽²¹⁾

また、当時の日本の新聞や雑誌も、フィリピンに対する同情を深め、アメリカ軍の略奪や放火、強姦などの野蛮な行為を報じる変化を示し、萬朝報は次のような記事を掲げ、フィリピン人に対するアメリカの不法行為を非難していた。

「総ての人間が平等であるというアメリカは、領土的野心がないと言っている。しかし、そのアメリカがフィリピンを征服し併合し、フィリピン人を奴隷としており、これではスペインとなんら変わりないではないか」⁽²²⁾。

(三) 日本の軍事的援助

日本に於ける革命派の代表であるボンセは、多くの志士やアジア主義者に紹介されたが、特に宮崎寅蔵や平山周、後に中国の初代大統領となった孫文を紹介されたことは、財政的支援を得る大きな力となった。日本におけるボンセの活躍、特に武器購入の状況を警視總監から青木周三外務大臣に宛てた報告、および波多野論文などから要約すると次の通りであった。⁽²³⁾ これら志士がボンセを犬養木堂に紹介すると、犬養は「米国のやり方は酷い。人道なぞ言われた義理じゃない。一泡吹かすのも好かろう」⁽²⁴⁾と深くフィリピン独立派に同情し、ボンセを憲政本党の中村弥六代議士に紹介した。中村代議士は極めて積極的で、フィリピンに関心を持ち同情を示し陸軍次官の中村雄次郎少将や、参謀総長川上操六大将および参謀本部の福島安正大佐や神尾光臣大佐などに接近し、一八九八（明治三二）年一〇月には、日清戦争で戦利品として捕獲したモーゼル銃およびスナイドル銃や弾薬五〇〇トンを払い下げることに決した。特に川上大将は「ヒリツピン独立と云つてもなかなか目的は遂げ難いと思う。我国としても今、あの方面に手を着けるコトは出来ぬが、国家の生命というのは永遠である。五十年、百年の後のことを考えねばならぬから、ヒリツピンの土人の歡心を失わないやうにして置く必要がある」⁽²⁵⁾、と関係者に述べ

るなど積極的であった。しかし、一二月下旬に至りアメリカ側に露見し、駐日アメリカ公使から武器購入に関する問い合わせを受けたため、弾薬だけが陸軍から大倉組に払い下げられ、アメリカを欺くためにドイツ人貿易商ワインベルガー (C. Weinberger) に売り、そこからフィリピンに売りさばくこととされ、手数料として五〇〇〇円がワインベルガーに支払われた。しかし、弾薬五〇〇万発はポンスが求めていた村田銃一万丁、弾薬六〇〇万発、固定砲一門、野砲一〇門、弾薬製造機一式とは大きく異なるものであった。⁽²⁶⁾ 中村はこれらの武器をフィリピンに輸送するために、三井物産から二〇〇〇トンの貨物船布引丸を三万八〇〇〇円で購入し、一八九九 (明治三二) 年七月一九日に、布引丸は長崎を出港し、三四名の船員と長野義虎中尉、水町袈裟吉中尉、下士官の中森三郎とフィリピン通訳兼務パイロットのパロギン (Manuel Paroging) が、フィリピン北部のカシグラン湾に向かう予定で出帆した。しかし、七月二一日に上海沖の船山列島付近で沈没してしまった。洋上に放り出されボートに乗っていた乗客と、六名の下級船員がキアング (Kiukiang) およびメネロス (Menelaus) 号に救助されたが、アギナルド軍に参加するために乗船していた義勇兵志望者は全て死亡してしまった。第二次支援の試みも行われたというが、アメリカの海上封鎖が厳しく、これら武器は台湾に陸揚げされ、次いで孫文の率いる中国の革命派に渡されたという。

一方、一八九八年一二月下旬、次いで翌年五月二〇日には、外務大臣青木周造を駐日アメリカ公使バック (A. E. Buck) が訪問し、香港領事の電報を示し、日本からフィリピン独立派に武器八万ドルが送られたと抗議した⁽²⁷⁾、一月一五日には海軍武官が調査した布引丸に関する詳細な資料を持参して再び来庁し抗議した。この引き続く抗議に、青木外相は、翌一九〇〇 (明治三三) 年二月二〇日に次のように回答した。⁽²⁸⁾

布引丸は長崎寄港までは沿岸通航船として取扱われ、七月一八日長崎寄港の際に外航船に変更されたものであ

り、弾薬は東京の火薬商大倉米吉から横浜のワインベルガー商会に売却したものを門司で搭載したものである。その際は台湾航路名義であり、長崎で外航航路と改められたが、渡航地が上海であったため、「別ニ怪ムヘキ形跡ヲ認メサリシ次第第二有候。該船ノ果シテ比律賓叛徒ニ弾薬供給ノ目的ヲ有セシヤ否ヤハ、今日ニ於テモ断定ノ途無之趣ニ候。尤モ、帝國政府ハ尚念ノ為、各地方庁及税関ニ対シ今後ニ注意ヲ加ヘ、嚴重警戒スベシトノ旨内訓ニ及置候」。

フィリピン独立戦争には、布引丸による武器弾薬の支援の外に、陸軍軍人や民間人も参加した。一八九九（明治三二）年七月一四日に、現役の陸軍大尉で元台湾軍司令部幕僚の原禎大尉、予備役陸軍砲兵少尉稲富朝次郎、下士官中森三郎、西内真鉄、宮井啓逸と政治問題を代表する志士の平山周が、香港経由で七月末にマニラに着いた。アメリカからの抗議を回避するため、原大尉は予備役に回され個人の資格で参加していたが、布引丸で遭難した水町中尉は現役であった。これらグループは多くの困難に遭遇しながら、バターン半島にあるアギナルドの司令部に着いたが、下士官兵の三名はタガログ語ができないことから、戦闘への参加が認められなかったため帰国することとなった。しかし、布引丸事件や原大尉が犬養から依頼された日本刀や、犬養の「大統領閣下が高尚に維持せらるる戦局、及び勇敢に遂行せらるる所の政略は、苟も東洋の安寧を希望する者、誰か之を賞賛せんや。此の理由により余は誠実に大統領閣下の成功を祈る」⁽²⁹⁾とのメッセージが、アメリカ軍に接收されてしまったため、三増領事がアメリカ軍司令官オティスから抗議を受けるなどの事件もあり、アメリカ軍の警戒が厳しくなったため、無事に日本まで帰国できたのは西内のみであった。

三 独立戦争以後に生じた日米関係

(一) フィリピン独立問題と日米関係

ジェームス・フィールド (James A. Field, Jr.) が、「アメリカの帝国主義はデューイの勝利の産物といえるかも知れない」⁽³⁰⁾ というように、デューイのマニラ湾の勝利がアメリカを帝国主義国家に変質させてしまった。デューイの要求により、七月末までには一万一〇〇〇人のアメリカ軍が派遣され、南マリアナ群島のグアム島がマニラへ向かうチャールストン (Charleston) によって占領された。そして、一八九七年六月にはハワイが、一八九八年一二月にはフィリピンが併合された。このように、アメリカが突然に帝国主義に変わったのは、米西戦争勃発一〇年前に発行された、海軍戦略家マハン (Alfred Thayer Mahan) の『海上権力史論』と、それに続く一連の論説がアメリカを大きく変えていたからであった。特に『海上権力史論』が発行された四ヶ月後の『アトランチック・マンスリー』誌上に、「アメリカが必要としているのは単なる巡洋艦の寄せ集めではない。いかなる国の海軍力にも対抗できる、強力な戦艦群からなるバランスのとれた巨大な海軍である。海軍予算を制限し住宅建設などに浪費するのは、長期的には経済的でなく、⁽³¹⁾ “けちな愚かな考えである”、との書評を送った海軍次官セオドール・ローズヴェルト (Theodore Roosevelt) は、積極的なデューイをアジア艦隊司令官に任命し、戦争とな⁽³²⁾ったならば直ちにマニラ湾のスペイン艦隊を攻撃することを命じていた。

フィリピンの併合について、アメリカ国内には独立宣言や憲法の精神に反する。フィリピンを併合すれば、アジアでヨーロッパ列強との紛争に巻き込まれ、大西洋と太平洋に二つの艦隊が必要となるなどとの反対論もあった。しかし、未開のフィリピン人を文明化するのは、アメリカの神から与えられた「明白な義務 (Manifest Des-

teny)である。フィリピンは極東へ発展する前進基地として必要であるなどの併合論が勝ち、一八八八年一月に併合されてしまった。そして、フィリピン併合が『海上権力史論』で、シーパワーを構成する「第三の重要な環」と規定した植民地と、さらに巨大な中国市場への夢をアメリカに抱かせ、一八八九年には国務長官ジョン・ヘイ(John Hay)から、中国市場への門戸開放・機会均等宣言が発せられた。アメリカ国内にはパナマ運河やハワイ、フィリピンを、アジアの偉大なる市場への“Step Stone”とし必要である。フィリピンは単に海軍基地として必要なだけでなく、西太平洋地域に対するアメリカの「重要な政治的・経済的利益」を、確保する“Key Stone”としても必要であるとされた。そして、フィリピン併合がアメリカ海軍にフィリピンを守るといふ新しい義務を課し、この新しいコミットメントが海軍力増強に根拠を与え、海軍力の増強が加速された。マニラ湾の英雄デュレー提督が海軍委員会(Naval Board)の議長として、サンチャゴ封鎖作戦の英雄ホブソン(Richmond Hobson)大佐が上院議員として、人種差別と日本の脅威を扇動し海軍力増強の必要性を訴えた。政治家では海軍力を増強しなければ、モンロー主義宣言とアメリカの名譽を放棄することになる。平和を欲するならば条約でなく、第一級の戦艦からなる第一級の艦隊が必要である。武力なき外交は召使に過ぎぬと演説し、物を醸したセオドル・ローズベルト大統領が、また、一九一九年から一九二四年まで上院外交委員長を務め、海軍のためなら何でもしよう。海軍長官が欲する増強は何でも認めよう、という熱狂的海軍主義者のロッジ(Henry Cabot Lodge)上院議員が、中国への門戸開放宣言を二回も宣言した国務長官のジョン・ヘイ(John Hay)が、海軍最頂のモルガン(John T. Morgan)上院議員や、マックドゥー(William MacAdoo)下院議員が、言論界では『レビュー・オブ・レビューズ』誌の編集長ショー(Albert Show)、ニューヨーク・サン紙のダナ(Charles A. Dana)などの海軍主義者が、ハワイやフィリピンの重要性和海軍力の必要性を訴えた。⁽³⁴⁾

一方、マニラ・アメリカンと呼ばれる米西戦争や統治初期に渡比し、退役・退任後にマニラに残った軍人、官僚や教師、フィリピンで事業を始めた実業家などが、植民地としてフィリピンを維持したいため、独立を与えれば満州のように日本の植民地にされてしまうと、根も葉もない過大な日本脅威論を展開した。これら日本脅威論の一例を示せば、一九〇〇年一月二十八日にはフィリピン派遣軍司令官のマッカサー (Arthur MacArthur) から、アギナルドに次ぐ革命軍ナンバーツウのトリアス (Mario Trias) 財務担当長官と日本領事が会合し、領事はトリアスに訪日を勧め、日本はフィリピンとの自由貿易を希望し、フィリピンに石炭貯蔵所を建設し、鉄道を敷設したいと申し出たと報告し、さらに日本の脅威は将来の問題でなく、現実の問題であると次のような所見をこの報告に添付した。⁽³⁵⁾

「ルソン島の最北端のアパリ港に行けば、晴れた日に望遠鏡を使えば六〇から七〇マイル離れた台湾の最南端が見える。日本が決意さえすれば、一昼夜で現在フィリピンに駐屯しているアメリカ軍の数倍の兵力を上陸させることができる。アパリからリングガへは七〇マイル、さらに九〇マイルでルソン島の中心地ボイボンモンクに至り、そこからマニラへは七〇マイルである。アパリは全く無防備な港であり、アパリは日本軍が一昼夜で上陸できる距離にあり、日本がマニラを占領しようと思えば二週間で可能である」。

さらに、日露戦争の勝利が日米関係を大きく変え、一九〇七年にサンフランシスコ市学務局が、日本人学童の隔離教育法案を決し、日米間の緊張が高まると、それまでの対日過大脅威論の影響であろうか、海兵隊は日本軍のフィリピン進攻に備え、六インチ砲二〇門、四・七インチ砲四門、四インチ砲四門、六ポンド砲一六門をオロガッポ基地に備え、一〇週間にわたり警戒態勢を敷いた。⁽³⁶⁾ 一方、フィリピン総督のスミス (James F. Smith) からは、次のような電報がワシントンに発せられた。これほど、フィリピン所在のアメリカ軍やアメリカ人は日本

軍の進攻に怯えていたが、その裏にはフィリピン人の日本への期待から、日本が依然としてフィリピン独立派に援助を与え、日本が独立派をあやつてアメリカ軍に対するゲリラ戦を展開していると猜疑していたことも影響していた。

「対日関係にその後どのような変化が生じたか。今のところ香港銀行には話を進めていないが、もし大きな変動があれば、フィリピンの銀行三行と株式信託会社の株券や金塊を、香港経由でロンドンに送金したい。実施することに同意するか」⁽³⁷⁾

このようなアメリカの対日脅威論や猜疑心を受けた日本は、一九〇五年七月二七日に総理大臣桂太郎と、元フィリピン総督で国務長官のタフト (William H. Taft) との間で、一九〇八年にはルート (Elihu Root) 国務長官と駐米大使高平小五郎の間で、日本がフィリピンの現状維持を認める交換公文を交換した。しかし、日本に対する猜疑心や警戒心は、日本の大国化やフィリピン独立論の高揚とともに高まり、一九一一年には取り調べをした日本人は医者と名乗っているが、実は土木技師であり、どこに要塞を建設するかを計画した地図や計画書を持っていたと報告するなど⁽³⁸⁾、作爲的に造られた情報や不確実な風説を根拠に、日本に対する猜疑心を高め、日本の進攻に怯えたのであった。

一九二四年のワシントン条約第一九条で、グアムやフィリピンの軍備現状維持が協定され、日本海軍の軍備が増強され、フィリピンやグアムが緒戦で日本軍に占領されると見積もらざるを得ぬ情勢となり、さらに一九三三年にフィリピンの独立を認めるヘア・ホウズ・カッティング (Hare-Hawes-Cutting Act) 法案が議会を通過すると、アメリカ国内にはフィリピンを守るべきか、捨てるべきかの議論が高まった。そして、一九三五年には陸軍戦争計画部長から守ることのできない基地は、戦略上不可欠なものでなくむしろ災害を招く、日本海軍の近代化

や勢力の増強に伴い、日本を対象に軍備を増強するのならば、アメリカ海軍が軍事予算の七五パーセントを使用し、アメリカの富を消耗し、そのうえ本国の防備には余り寄与しない。日本を対象としたオレンジ計画 (Orange Plan) は、戦略的には愚かな「狂気の計画」である。防衛線をアラスカ・ハワイ・パナマの線に後退すべきであると主張した。⁽³⁹⁾しかし、海軍は戦争計画課での審議であれ、将官会議あるいは陸海軍統合会議であれ、議会であれ、常にフィリピンだけを切り放して考えるべきではない。フィリピンを保持する決意を明示するだけで、日本は兵力の一部をフィリピン作戦に割かなければならないので、アメリカ本土の防衛にも価値がある。またフィリピンは極東の自由主義の窓であり、アメリカの極東の権益やアメリカ市民を守る基地であり、フィリピン放棄は極東からの撤退に連なるなどと、強くフィリピンを防衛する必要性を主張した。⁽⁴⁰⁾

また、ヨーロッパでヒトラーの侵略が始まり、さらに日本の軍事力が増強されると、フィリピンの防衛が困難となり、一九三五年後半にはアメリカ海軍も、フィリピン防衛を「対日戦争計画」上は断念した。しかし、マニラ・アメリカンの子孫で、ケソン (Manuel L. Quezon) 大統領の軍事顧問となったマッカーサー (Douglas MacArthur) 大將や、かつてフィリピン保護構想を主張したスティムソン (Henry L. Stimson) 國務長官などから強硬な反対があり、フィリピン軍創設に対するマッカーサーの樂觀や、空の要塞と呼ばれた大型爆撃機 B-17 への過大期待などから、航空兵力の増強でフィリピンを防衛することとし、一九四一年一月四日には B-17 爆撃機の第一陣として一八機が、ハワイ、ニューカレドニア、ダウイン経由でクラークフィールド飛行場に展開され、一月八日には B-17 は三五機、P-40 戦闘機は一〇〇機と、太平洋のいかなる基地より多数の新鋭機が優先的に配備された。

(二) フィリピン独立問題と日比関係

三国干渉を受け孤立した日本が期待出来るのはイギリスであり、新興国アメリカであった。このため前述のように、日本政府や官憲のフィリピン独立派代表や、在日フィリピン人に対する対応は冷たいものであった。多くの新聞もフィリピン人には自治能力がなく、フィリピンの独立は国内的に混乱を招き西欧列強、特にドイツに領有されることを恐れ、アメリカが領有することがアジアの安定に連なると論じていた。このような雰囲気のため、外人記者を東京倶楽部に集め、独立派のボンセに記者会見をさせた志賀重昂は東京倶楽部を除名された。また、革命政府から派遣された代表団も、日本政府から外交団として認証されなかった。これがフィリピンの独立運動や独立戦争に対する日本政府としての関与の実態であった。

しかし、近代国家となった日本へのフィリピン人の期待は大きく、時澤大尉はフィリピン人の日本への期待は、日清戦争の「戦勝ハ無論」ではあるが、「反徒ガ旗竿グルニ際シ為シタ」日本が援助するとの噂なのか、あるいはホセ・リサルが日本主義を唱えたからなのか、フィリピン人のアジア主義的観念からなのか、「萬民ノ中ニハ」戦争になった時には、必ず日本が援軍を派遣して助けしてくれると信じていると報告していた⁽⁴¹⁾。また、内乱中に島内を視察した秋津島の士官は、「日本ニ対シテ最モ好意ヲ示シ、小官一行ニ対シテモ頗ル慇懃」であり、これは「同人種ト信シ、且ツ日本ハ戦勝国ナルニ感激セシコトニヨルナラン」と報告しており、日本の近代化、特に日清戦争の勝利がフィリピン人に日本に対する期待を生んだのであろう。さらに、フィリピン人を勇気づけたのが、日露戦争に於ける日本の勝利であった。日本の勝利が多く有色人種に、白色人種の支配から脱する自信と独立への希望を与えたが、特に感動を与えたのが金剛と結びついた日本海軍の日本海海戦の完全勝利であった。当時、デレチョ法律大学の学生で最高裁判所判事になったハリレノ (Antonio Harilleno)、国会議員となったバ

メンタ (Isidro Vamenta) は、感動してマニラの日本領事館に祝電を打った。⁽⁴³⁾ また、のちに議員となったコーポス (Enrique Corpus) は、「われわれはアジアの時代が来たと感じた。アジア人がヨーロッパに対して立ち上がる時が来た」と感じた⁽⁴⁴⁾と回想している。

このように、フィリピンの日本への期待は、日清戦争、次いで日露戦争の勝利で高まったものであったが、さらに金剛のマニラ寄港時に生まれた架空の援助契約、独立戦争に参加した僅か六名の私設義勇兵や、海没してしまった布引丸の武器・弾薬などが誇張されて、さらに高まり、この独立戦争時に生まれた対日援助への期待がフィリピン人の独立願望や土着宗教ともからみ、フィリピン人の心に日本が救世主ように期待されるに至った。このため、「アメリカとフィリピンとの戦争の時には、日本軍が援助してくれる。今も日本の軍艦が頻繁にフィリピン沖に現れている」。「日本に亡命している革命軍の司令官リカルテ (Artemio Ricarte) 将軍が、日本軍の援助を受けて帰国し、独立闘争の先頭に立つ」などの噂が、まことしやかに流れ続けた。そして、この架空の対日期待が狂信性を持った宗教的なコロルム (Colum) 運動に連動していった。この運動は農村や都市の貧民層を中心に起こり、各地で叛乱を生起させたが、この運動の指導者のペドロ・カボラ (Pedro Kabola) は、革命期の神格化された伝説的英雄フェリペ・サルバドル (Felipe Salvador) や、ホセ・リサールの霊が立ち上がれと告げたと民衆に説き、決起すれば日本の皇帝が叛乱軍を支援し、軍艦を派遣して大地主やアメリカ人をフィリピンから追放してくれると決起を促し、一九二五年三月に決起した。しかし、この決起はアメリカがフィリピンの治安を維持するために創設した国家警察隊により弾圧されてしまった。

この運動を引き継いだのがベニグノ・ラモス (Benigno Ramos) で、ラモスはケソン大統領の顧問であったが、ケソンの親米的態度から袂を分かち、「サクダル (タガログ語の真理あるいは抗議を意味する言葉)」という週刊誌

を発行し、発行一年余りで発行部数を二万八〇〇〇部まで伸ばし、一九三三年一〇月には「ササクダリスト党 (Sandalista)」を結成し、一九三四年の選挙では下院に三名を送るまでに勢力を伸ばした。しかし、一九三五年五月に、一〇年後に独立を認めるというタイディングス・マクダフィ (Tydings-McDuffie) 条約をアメリカと結び、その成否を決する憲法を承認する国民投票が行われる前に、サクダル党の急進派が即時独立を求めて、マニラ周辺のラグナ、カビテ、リサル、ブラカン、パンパンガ、ヌエバなどで決起し、二三〇〇名の参加者中、国家警察軍により五七名が殺され、六七名が負傷を負い、指導者が逮捕され、政府の弾圧で党勢は勢いを失ってしまった。ラモスは決起当時日本にいたが、それでもラモスが日本から帰国する一九三八年まで三年間、サクダル党は存続していた。ラモスは帰国すると党名を「ガナツプ党」と改め活動も穏健化した。しかし、一九三九年五月に公金横領罪で、突然逮捕され一〇年の刑を科せられてしまった。これはラモスが日本との同盟の必要性を強く訴えたからと言われている。ラモスに対して日本は明治期のように、志士の頭山満や内田良平などのアジア主義者が支援し、「自由フィリピン (Free Philippines)」と題するパンフレットなどを作成する資金を与え、数千部をフィリピンに送ったことは事実であるが、それがサクダルの決起に与えた影響は不明である。⁽⁴⁵⁾

日本に生まれたアジア主義は、主として大陸発展の先兵として、中国や蒙古、中国の延長としてのベトナムやタイに拡がった。しかし、日本人が接するフィリピン人がホセ・ラモスのように、エリート階級で欧米留学者が多かったためか、フィリピン人はアジア人でありながら西欧的であると、フィリピンに対する日本の関心は移民や通商の拡大でしかなかった。このため、一九一三年四月のカリフォルニア州議会における排日移民法案の制定を契機として強まったアジア主義でも、フィリピンへの関心は低くかったし、フィリピン人のアジア主義に対する関心も低かった。フィリピン人が日本のアジア主義に同調し始めたのは、一九二四年の排日移民法案を受けて

一九二六年に結成された全アジア協会や、アジア民族大同盟からであった。そして、一九二七年にはフィリピン大学政治学部長のカロウ (Maximo Kalaw) 教授が、フィリピンの独立には、全アジア協会の活動を強化すべきであるとの意見を発表し、上院議員レクト (Claro M. Recto) が、「アジアのためのアジア」というスローガンは、「日本のためのアジア」に過ぎないと反論するなど、この時期に至って、フィリピンでも日本のアジア主義への関心が高まり、大きく報道されるようになった。そして、アジア連盟にはピオ・デュラン (Poi Duran)、ホセ・ラウエル (Jose Laurel)、モデスト・ファロイアン (Modesto Farolan) などが参加し、一九三四年七月にはフィリピン支部も創設された。⁽⁴⁶⁾

アメリカ植民地統治当局は、フィリピン人の日本に対する期待を打破しようと、教師には日本を信頼しないよう教育することを要求し、反日的記事を書く新聞を支援し、新聞は日本の植民地となった朝鮮や台湾の苛酷な住民の生活や、日本の高圧的な植民地政策を繰り返し報じた。⁽⁴⁷⁾ しかし、独立を願望するフィリピン人にとり、日本人の愛国心と国民の一体感は印象強く、ロムロ (Cris P. Romulo) は「私は日本人を称賛する。私は彼等の愛国心を称賛する。また日本の近代化を高く評価する。日本の伝統に敬意を表する。日本人の技術と技術に対する情念に敬意を表する」⁽⁴⁸⁾と日本を称賛し、日本人の愛国心と高潔などを学ぶべきであると繰り返し繰り返し主張した。

また、独立戦争時に大尉として参戦し、義勇兵の中森三郎軍曹を最も尊敬していると、来日のたびに話していた初代大統領のケソン⁽⁴⁹⁾も、日本脅威論は独立反対論者の陰謀であると公言していた。このため、ミネソタ州選出のアレキサンダー (John Alexander) 下院議員から、ダバオを「第二の満州国」にしようとしているのに、ケソン大統領の日本に対する対応は、あまりにも親日的であると、「ケソン大統領治下における日比関係の実地調査」

要求決議が提出された。しかし、ケソン大統領はダバオの日本人はフィリピンに何ら被害を与えていないばかりか、フィリピンの発展に不可欠であり、また日本人には学ぶべきところが多いと反論するなど、アメリカに疑惑を与えるほど日本を賛美していた。さらに、ケソン大統領は独立問題に関して渡米する途次の一九三七年一月、休暇で翌三八年七月と二回も訪日した。三七年一月には乗船したカナダ号 (Empress of Canada) が、神戸から横浜に回航される短い時間を利用して汽車で東京に向かい、昭和天皇と会見し、有田外相などに対米交渉の内容を知らせるなど、極めて日本を意識した行動をとった。三八年の訪日は日本からサクダル党を遠隔操作しているラモスの活動を阻止し帰国させることであった。このようなケソン大統領の行動は、アメリカの出兵によつては日本に頼ることを示した外交上のゼスチャーであったのか、あるいは対立する日米の枠外にフィリピンを置きたいという小国特有のバランス外交であったかは不明であるしかし、このように、フィリピンでは独立に関しては、常に日本に対する期待があった。第二次独立戦争後に日本や日本人がフィリピンの独立を支援することはなかったが、フィリピン人は日本を意識し、日本に期待し日本を利用するなど、日本はフィリピン独立に関しては、常に影の主役を演じ続けたのであった。⁽⁵⁰⁾

革命軍司令官のリカルテ (Artemio Ricarte) 将軍は、アメリカへの帰順を拒否し、投獄や国外追放を繰り返したが、一九一五年には日本に亡命した。その後、ケソンが大統領になるとケソン大統領は再三帰国を勧めた。しかし、リカルテ将軍は星条旗が翻っている間は帰国しないと応ぜず、リカルテが帰国したのは、三〇数年後の一九四一年一二月末であった。日本軍とともにマニラに入ったリカルテやサクダル・ガナツプ党員を、ホセ・リサル夫人やラモスが出迎えた。リカルテ将軍が帰国したことを知ったサクダル・ガナツプ党員やリカルテ信奉者は歓喜した。しかし、フィリピンを占領した日本軍は、フィリピンの占領行政に、リカルテなどの親日派を排除

し、従来のエリート集団を登用した。日本軍が親日派を登用し始めたのは、日本の敗北が確定した一九四四年中旬以降であり、一月にはリカルテ、ラモス、ピオ・ドランなどによって、「アジアからアングロサクソンの影響を一扫し、フィリピン共和国を準備し、平和と秩序を守り、アジアの共通の敵と闘うために日本軍への協力を惜しまない」という目的で、日本軍の支援を受けて、フィリピン愛国同志会 (Makabayang Pili-pin) が結成された。しかし、リカルテ將軍は、この組織とは別に、一九四四年一月二十四日、フィリピンは自分の手で守ると、「平和と秩序の義勇軍」を、また、翌一九四五年一月にはアウレリオ・アルペロ (Aurelio Alvero) が、「タガログの鉄の腕 (タガログ語でフィリピン人の影響が再び戻るよう、鉄のような意志で遂行すると言う意味)」を結成した。そして、アルペロは一九四五年一月、日本軍の敗北を眼の当たりにしながら、「我々は栄光あるタガラ (フィリピン人) の国民である。スペインのフィリップのものでもなければ、アメリカのものでもない。まして日本のもでもない。決して他者の道具にはなるまい。私的な考えに惑わされ、国のことを忘れてはならない」として武器を取った。かれらは決して日本のために戦ったものではなかった。親日勢力の中には、密偵・通訳や駐屯地要員として、日本軍に協力した者もいた。しかし、多くの者はアメリカの支配を脱するために日本に接近し、日本に協力した独立主義者であり、民族主義者であった。しかし、戦後に待っていたのは「裏切り者」、「反逆者」、「日本軍の犬」という汚名であり投獄だった。日本の金剛の寄港によって火がついた、日本の援助により独立を達成しようとしたフィリピン人の夢は挫折し、第二次大戦後にはアメリカの援助により、戦前からの少数エリートによる独裁制が再び復活したのであった。⁽⁵¹⁾

おわりに

日本政府は決してフィリピンの独立戦争時に、革命派の要求を認め支援することはなかったし、その後も太平洋戦争直前に至っても、対米戦争を避けるためにフィリピン迂回論、米英分離論が真剣に討議されていたことが示すとおり、日本のフィリピンに関する戦争前の関心は終始経済的な進出と移民問題にあった。一九一〇年代の南洋群島占領後に生じた第二次南進のドライブも、移民や通商の拡大であり、しかも南進の方向は委任統治領となつた南洋群島やニューギニアであり、一九三〇年代後半に生じた第三次南進も、一九四〇年七月二六日に近衛内閣が本格的に推進した基本国策要綱（一九四〇年七月二六日）や、二七日の「大本営政府連絡会議で決定された「世界情勢ノ推移ニ伴フ時局処理要綱」でも、南進の対象は仏印、香港、オランダ領インドネシアなどであり、フィリピンを武力で占領する計画はなかった。このように、日本の脅威というものは、フィリピン人の単なる日本の援助に対する「ファンタシーの産物」から生まれたものであった。日本に対する過大期待が、単なる土着宗教的な信仰にとまなうものから生まれたのか、あるいは日本に派遣されたラモスやボンセなどに対する陸軍参謀本部を中心とした積極的対応への誤解による過大期待などによるのかは不明であるが、僅か六名の義勇兵の独立戦争への参加と、途中で沈んでしまった布引丸の武器援助が、その後半世紀にわたり日米間に大きな猜疑心を生み、日米・日比間に緊張と対立、そして、フィリピン人には独立という夢をもたらし続けたのであった。

(一) フィリピン独立戦争に対する日本の支援については、Francis St. Clair, *The Katipunan* (Manila: Solar Publishing Corporation, 1989, First edition in 1902), Eufonio M. Alip, *Philippine-Japanese Relations* (Manila: Alip &

- Sons, Inc., 1959), Aurelio R. Calderon, *The Turmoil of Change in Philippine-Japan Relations, 1565-1945* (Manila: De La Salle University, 1976) なを参照のこと。なお Clair は日本の援助を強く否定し、Alip は古く資料を使ったのであろうか、日本の援助を評価し、Calderon は両者の意見を紹介している。なお、日本側の研究としては波多野勝『近代東アジアの政治変動と日本の外交』（慶應義塾大学出版会、一九九五年）、回想などについては「日比志士と比律賓独立援助軍」（黒竜会篇『東亜先覚志士伝 上』復刻、原書房、一九六六年、六二七―六四六頁）、仲原善徳篇『フィリピン独立正史』（中文館書店、一九四四年）などがある。
- (2) 沼貞風『新日本の図南の夢』（復刻・岩波書店、一九四二年）六五八―六五九頁、伝記学会編『南進日本の先覚者たち』（六甲書房、一九四一年）二〇八―二一〇頁、『日本及日本人』（第五八号、大正一三年一〇月五日秋季増刊号などを参照。
- (3) Clair, *op. cit.*, pp. 129-130, Alip, *op. cit.*, p. 43.
- (4) 吉川洋子「米領下マニラの初期日本人商業 田川森太郎の南方関与」（『東南アジア研究』第一八巻第三号、一九八〇年）三一―六五頁。
- (5) Clair, *op. cit.*, p. 128.
- (6) 「機密第一四号 呂宗島内乱ニ関スル事件ニ付出張取調復命書（明治二七年一〇月二九日）」「米西戦争一件 その一」（資料番号 5. 2. 1. 9）「外交史料館蔵、なお、『練習艦 金剛の件』『公文備考（明治二九年）』『防衛研究所図書館蔵には記載がない。
- (7) 「在馬尼刺米国軍士人間衝突突交戦ニ関スル報告一件（資料番号 5. 3. 2. 16）」前掲「米西戦争一件 その一」には、日本からフィリピンに武器が輸出されているとの諸外国の新聞報道が多数収録されている。
- (8) 「馬尼刺在留帝国臣民中野牧太郎外九名ヨリノ来簡写（明治二九年九月九日）」前掲「米西戦争一件 その一」。
- (9) Clair, *op. cit.*, p. 126.
- (10) 「第七六三・七六四文書 在香港比島叛徒秘密謀議情報ノ件（一・二）（明治三一年五月二日・一四日）」、および「第七九六文書『マニラ』反将『アギナルド』ノ態度ニ関スル件（明治三二年八月一二日）」（外務省編『日本外交

- 文書 明治三十一年』第三一卷第二冊、日本国際連合協会、一九五五年。
- (11) Alip, *op. cit.*, p. 48, Calderon, *op. cit.*, p. 32.
- (12) 『第七五七文書 米西戦争ノ際局外中立ヲ宣言スベキ建議ノ件 (明治三十一年四月二六日)』、『付記二五月二日 海軍大臣訓令』前掲『日本外交文書 明治三十一年』。
- (13) ドイツのフィリピン領有について、参謀本部から派遣された時澤右一大尉は、ドイツ領事が「吾ガ眼ノ黒キ間ハ、米ハ勿論何ノ邦国モ比律賓ニ於テ意ヲ俣ニスルコト能ハス」と「放言セリ」と報告し、軍令部から派遣された吉田増次郎大尉は、ドイツとスペインとの間に「何事カ存在」し、「比律賓群島の一部」が「独逸ノ版図ニ帰スナカラシ」と報告した(「時澤大尉報告 第二一報告 (明治三十一年六月二〇日)」、「極秘諜報第八八号 (明治三十一年六月二六日)」、「大隈重信文書 (R-20)」A-798, 799, 国立国会図書館憲政資料室蔵)。また、「第七七七文書 独逸ノ態度情報ノ件 (明治三十一年六月二八日)」、「第七八一文書 比律賓諸島ニ対スル独逸ノ態度 (明治三十一年七月七日)」、「秋津島艦長報告 (馬尼刺及香港派遣第七回報告 (明治三十一年七月四日)」、「第九回報告 (同年七月一四日) (前掲「大隈重信文書」) にも同様な記述がある。
- (14) Doc. No. 235, Doc. No. 350, *Foreign Relations of The United States with the Annual Message of the President* (New York: Kraus Reprint Corporation, 1968), pp. 479-481.
- (15) 「馬尼刺及香港派遣第九回報告 (明治三十一年七月一四日)」前掲「大隈重信文書」。
- (16) Thomas A. Bailey, "Dewey and the Germans at Manila Bay", *The American Historical Review*, Vol. XLV, October, 1939, p. 75.
- (17) 「第八〇五文書 比島処置ニ付米国政府ヘ勧告ノ件 (明治三十一年九月一日)」、「第八一一文書 比島処置ニ関スル日本政府意見通報ノ件 (明治三十一年九月八日)」前掲『日本外交文書 明治三十一年』第三一卷第二冊。アメリカの対応については James K. Eyre, Jr., "Japan and the American Annexation of the Philippines," *Pacific Historical Review*, Vol. XI, 1942 を参照
- (18) 入江寅次『明治南進史稿』(井田書店 一九四三年)二〇〇—二〇二頁。

- (19) 「時澤大尉報告 第五五報告(明治三一年九月一日)」前掲『大隈重信文書』。
- (20) 「第八二七文書 革命党政府委員出発並ニ比島情勢具報ノ件(明治三二年十一月三〇日)」前掲『日本外交文書』第三一卷第二冊。
- (21) 「第五四八文書 米國ノ比島占領宣言並ニ革命党ノ反对宣言具報ノ件(明治三二年一月一四)」前掲『日本外交文書明治三二年』第三二卷。
- (22) 「萬朝報(一八九九年一月一五日)」、Alip (Trans), *op. cit.*, p. 45.
- (23) 波多野勝「フィリピン獨立運動と日本の対応」、『アジア研究』第三四卷第三号(一九八八年一月)、時任英人『明治期の犬養毅』(芙蓉書房、一九九六年)、木村毅「布引丸 フィリピン獨立軍秘話」(恒文社、一九八一年)、仲原善徳編『フィリピン獨立正史』(中文館書店、一九四四年)などによった。
- (24) 宮崎竜介・小野川秀美編『支那革命物語』(『宮崎滔天全集』第一卷、平凡社、一九七一年)、三八九頁。
- (25) 黒竜俱樂部編『国士 内田良平伝』(原書房、一九六九年)一八八頁、前掲『東亜先覚志士伝 上』六三〇頁。
- (26) Enrique J. Corpus, "The Japanese and the Philippine Revolution", *Philippine Social Science Review*, vol. IV (October, 1934), p. 291.
- (27) 「第五六一文書 比島叛徒ニ供スヘキ武器密輸ノ情報ニツキ通知ノ件(明治三二年五月二二日)」、『第五六二文書 武器密輸ノ情報ハ其ノ形跡ナキ旨回答ノ件(同年五月三二日)」、『米國公使ヨリ青木外務大臣宛覚書(明治三二年五月二二日付)』、前掲『日本外交文書 明治三二年』第三一卷。
- (28) 「第五六六文書 サツドル島付近ニテ難破シタル布引丸ニ叛徒宛軍需品搭載シ居タル情報通知ノ件(明治三二年一月一五日)」および「付属書 米國海軍大尉エー・エル・キー報告」、『第五六八文書 海難船布引き丸ノ件ニツキ照会ノ件(二)』付記「サドル島沖沈没布引丸ノ搭載貨物ニツイテ回答ノ件(明治三三年二月二〇日)」、同右。
- (29) 平山周「支那革命党及び秘密結社」八一頁、前掲『明治期の犬養毅』二六三頁。
- (30) James A. Feld, Jr., "American Imperialism: the Worst Chapter in Almost any Book", *American Historical Review*, Vol. 83, No. 3 (June, 1978), p. 166.

- (31) ロースウェルト大統領が「マハンのシーパワーの理論がロースウェルトともにホワイトハウスに入った」といわれるのは「アメリカの政策を変えた」。(Harold & Margaret Sprout, *The Rise of American Naval Power, 1776-1918* Annapolis: U. S. Naval Institute Press, 1990) pp. 169-176.)
- (32) Whitney A. Grisworld, *The Far Eastern Policy of the United States* (New York: Yale University Press, 1938), pp. 11-14.
- (33) Margaret T. Sprout, "Mahan: Evangelist of Sea Power", Edward M. Earle, eds., *Makers of Modern Strategy: Military Thought from Machiavelli to Hitler* (Princeton: Princeton University Press, 1943), p. 89. Walter Mills, *Arms and Men: A Study in American Military History* (New York: G. P. Putnam's Sons, 1936), p. 227.
- (34) George T. Davis, *A Navy Second to None: The Development of Modern American Naval Policy* (New York: Harcourt Brace, 1940), pp. 75-76. William E. Livezey, *Mahan on Sea Power* (Norman: University of Oklahoma, 1981), p. 181.
- (35) James H. Blount, *American Occupation of the Philippine, 1898-1912* (First Edition, New York: G. P. Putnam's Sons, 1913. Reprint, Solar Publishing Corp, 1986), p. 328-9.
- (36) Josephus Daniels, *The Wilson Era: Years of Peace, 1900-1917* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1944), pp. 161-168. Arthur S. Link, *Woodrow Wilson and the Progressive Era, 1910-1917* (New York: Harper, 1953), p. 296. 当時の日米危機については秦郁彦『太平洋国際関係史』(福村出版「一九七二年」六三一七四頁を参照)。
- (37) Blount, *op. cit.*, p. 620.
- (38) *Ibid.*, p. 329.
- (39) ラッセル・F・ワイグリー(岩野一郎訳)「アメリカ陸軍と極東戦略」(細谷千博他編『日米関係史2 開戦に至る一〇年(一九三一—一九四一年) 陸海軍経済官僚』(東京大学出版会、一九七一年)三二—三八頁)。
- (40) ウォルドウ・ハイリンクス「アメリカ海軍と対日戦略」、同右、一〇六頁、一七四—一七五頁。

- (41) 「時澤報告 第五七号 (明治三二年九月八日) 前掲「大隈重信文書」。
- (42) 「呂宋島内視察報告 (明治三二年九月七日)」 「公文備考 外交・騒乱 亜米利加西班牙交戦 一件 (明治三一年) 中二四巻、防衛研究所蔵」。
- (43) Grant K. Goodman, "The Problem of Philippine Independence and Japan: The First Three Decades of American Colonial Rule", *Southeast Asia, An International Quarterly*, vol. 1, No. 3 (Summer, 1971), p. 168.
- (44) Alip, *op. cit.*, p. 44.
- (45) 中野聡『フィリピン独立問題史』(竜溪書舎、一九九七年) 五一―五四頁、鈴木静夫『物語フィリピンの歴史』(中央公論社、一九九七年) 一七三―一七四頁。
- (46) Lydia N. Yu-Jose, "Organizatos and Philippine-Japanese Relations 1890-1941: Friends But Not Brothers," *Solidarity*, No. 141-142, (Jan/June, 1994), pp. 130-131, "Asian Monroeism—A Prediction that came True: The Recto-Kalaw debate in 1927 on the subject of Asiatic Monroeism," Claro M. Recto, *Three Years of Enemy Occupation* (People's Publishers, 1946), pp. 131-152.
- (47) Goodman, *op. cit.*, p. 171.
- (48) Carlos R. Romulo, "From the Land of the Cherry-Blossoms and Chrysanthemums," *The Citizen* (18 September 1919).
- (49) 前掲『布引丸フィリピン独立秘話』二二頁。
- (50) 中野、前掲書『二二四―二二三〇頁。Elpidio R. Sta. Romana and Ricard T. Jose, "Never Image yourself to be otherwise: Filipino Image of Japan over the Centuries," *Asian Studies*, vol. XXIX, April 1991, pp. 71-72. Lydia N. Yu-Jose, *Japan View the Philippines, 1900-1944* (Manila: Ateneo de Manila University Press, 1992), pp. 18-19.
- (51) 寺見元恵「日本軍と共に戦ったフィリピン人」(宮本勝・寺田勇文篇『アジア読本 フィリピン』(河出書房新社、一九九四年) 二九九―三〇五頁、前掲『物語フィリピンの歴史』一九三―二〇四頁。なお、フィリピンの独立をめぐ

る太平洋戦争中の日本の対応については、波多野澄雄『太平洋戦争とアジア外交』（東京大学出版会、一九九六年）一四―一二三頁を参照。